

しろあとだより

第 19 号
2019 年 10 月

高槻市立
しろあと歴史館

茨木市安威地域における大織冠伝承について

千田 康治

はじめに

高槻市立しろあと歴史館と同今城塚古代歴史館では、平成三〇年(二〇一八)に秋季合同特別展「藤原鎌足と阿武山古墳」を開催し、第二会場であるしろあと歴史館は「藤原鎌足の姿・三島の大織冠信仰」のテーマで展示を実施した。

茨木市安威地域は、鎌足の廟所との社伝を有する奈良県桜井市多武峯の談山神社に改葬される以前に、鎌足が埋葬された「阿威山」の地とされる。本稿では、展示に際して実施した安威周辺の大織冠(鎌足の後世の別称)にまつわる伝承についての調査の成果を紹介する(1)。

一、鎌足の「阿威山」埋葬

談山神社は、社伝によると鎌足の子定慧が鎌足の遺骸を多武峯に改葬し、その上に十三重塔を建てたのをはじまりとする。鎌倉時代初期の建久八年(一一九七)に成立した『多武峯略記』では、『荷西記』を引用して鎌足の遺骸が多武峯に葬られた経緯を記している(2)。それによれば、定慧が天武七年(六七九)に唐から帰国した後、弟の不比等(父鎌足の墓所について尋ねたところ「撰津国嶋下郡阿威山也」と答えた。そこで定慧は自ら二五人の大夫を率いて阿威山の墓所へ赴き、遺骸を多武峯へ改葬したとある(3)。この記述は、談山神社の縁起として絵巻物も制作され、広く知られる『多武峯縁起』にも引き継がれた。安威地域の大織冠伝承は、同地が談山神社建立伝承に登場する「阿威山」と考えられたことに起因する。安威地域は、茨木市東部を南北に流れる安威川の中流域の右岸に位置す

目次

「茨木市安威地域における大織冠伝承について」 千田康治……1

る(図1)。昭和九年(一九三四)に発見され、鎌足が被葬者として有力視されている阿武山古墳とは、安威川を挟んで向かい合う位置にあたる。

安威を含む古代の茨木市・高槻市周辺は三島とよばれていた。『日本書紀』には皇極三年(六四四)、中臣鎌足は祭祀を担う神祇伯への就任を固辞し、三島に退いたとある。藤原氏の伝記で天平宝字四年(七六〇)に成立した『藤氏家伝』では、これを岡本(舒明)天皇の代の初期(六三〇年代か)とし、「三島別業(別邸)」に帰去したとしている。これらから、中臣氏が三島と繋がりを持っていたことがうかがえる。

二、大織冠神社(図2・西安威二丁目)

將軍山の頂に位置し、鎌足の古廟とされる古墳に創建された神社である。現在は、後述する阿為神社によって管理されている。

考古学上は、將軍山古墳群の1号墳とされる円墳で、地元では將軍塚とも呼ばれている。築造年代は、鎌足の活躍期より古い古墳時代後期(六世紀後半)と推定される。南向きに開いた横穴式石室を有し、玄室の規模は長さ四・五m、幅一・七一m、

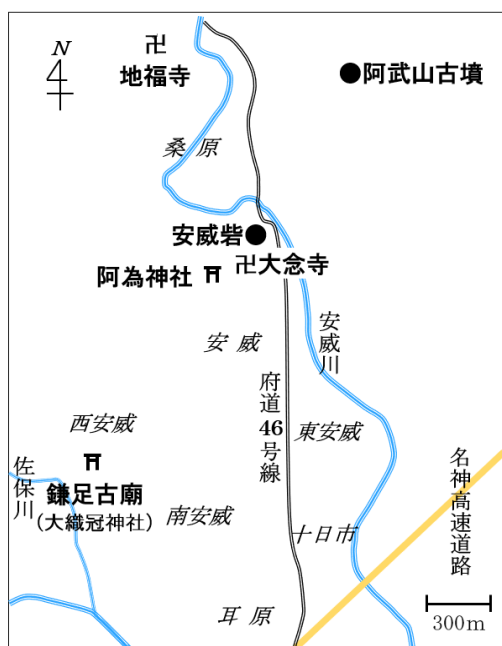


図1 関連地図

高さ二・四mである。そこに、鎌足と息子の不比等を祀った社が鎮座している。参道には、安威村に所領を有していた旗本の深津正保が文政七年（一八二四）に寄進した鳥居が建つ。

鎌足の古廟について記述が最初に確認できるのは元禄一四年（一七〇一）に完成した摂津国の地誌『撰陽群談』である。同書には「將軍塚 同郡安威村ニアリ 大織冠鎌足公ノ荒墓ナリ 従是和州多武峰ニ改葬ス所傳云 時人悲ミ惜デ棺ヲ奪ント挑ミ争ヒ 終ニ遺骸ヲ分リ 因ツテ一名胴墓トモ云ヘリ 又改葬ノ地再動ヲ以ツテ動墓トモ云ヘリ 今亦土俗將軍塚ト稱ス 山ハ其部ニ比ス」とある。鎌足の亡骸を多武峰に改葬する際、それを嘆いた地元の人々が強く反対し、最後は胴と首とを分けて、胴を残したため「胴墓（どうのはか）」との別称ができたのである。また、改葬により動かされたため「動墓（どうのはか）」とも呼ばれたことが分かる。寛政一〇年（一七九八）に刊行された『撰津名所図会』では、概ね『撰陽群談』の記述を引き継いでいるが、「動の塚（どうのつか）」の名称の由来として、改葬の際に塚が鳴動したためと記している。

明治九年（一八七六）に記された『古城戦場古蹟古跡書上控』には遺骸を分けた話はなく、多武峰改葬後、その跡に鎌足の遺物である鏡と「太刀刀」（原文ママ）、左鎌を納めたとある。後に鏡と太刀刀は掘り起こされ、阿為神社の社室になったと伝える（4）。ここに記された鏡が、同社を管理する阿為神社に伝わる重要美術品・三角縁唐草文帯二神二獣鏡である（5）。鏡の詳細は後述する。



図2 大織冠神社



図3 鎌足命日の祭礼。右側の石碑は九条道孝が建立

阿威山から多武峰への改葬伝承が、どの程度世間に広まっていたのだろうか。將軍徳川家光の命により寛永一七年（一六四〇）に制作された『東照社縁起』では、徳川家康の遺骸を久能山東照宮から日光東照宮へ改葬する事は、大織冠を阿威から談山に移した先例に倣ったと記す。これから、一七世紀前半には広く認知されていたと考えられる（6）。

地誌や絵図に載る鎌足の古廟の名称は、次の通りとなる。

『撰陽群談』 元禄一四年（一七〇一）……將軍塚

『和漢三才図会』 正徳二年（一七一一）……石寶殿

『撰津志』（日本輿地通志畿内部） 享保二〇年（一七三五）……藤原氏荒墓

『撰津国名所大絵図』 寛延元年（一七四八）……將軍塚大織冠廟

『肉筆彩色西国街道名所絵図』（個人蔵・高槻市立しろあ歴史館寄託）

『撰津名所図会』 寛政一〇年（一七九八）……大織冠鎌足公荒墳

『山崎通分間延絵図』 文化三年（一八〇六）……將軍塚大織冠鎌足塚

『新改正撰津国名所旧跡細見大絵図』 天保七年（一八三六）

……將軍塚大織冠廟

地誌類が刊行されるようになった一八世紀前半においては、鎌足古廟の名称は多様であるが、一八世紀半ば以降、「大織冠」の名を冠した名称が定着したことがわかる。

なお、大織冠神社と記したものは明治七年（一八七四）の「阿為神社並大織冠神社取調書」（個人蔵）が管見の限り最初である（7）。神社となったのは明治時代になってからと推定される。

江戸時代には、鎌足の孫の房前を祖とする藤原北家の流れをくむ五撰家の一つ、九条家によって祭祀が行われた。鎌足の命日には同家の使者が訪れ、反物二千疋を奉納した（8）。江戸時代末期、明治時代の当主であった九条道孝（一八三九〜一九〇六）は、自ら祭祀に赴いており、同社には、明治一四年（一八八一）に、九条道孝が建てた石碑がある。安威村の旧家の当主が明治一三年（一八八〇）に記した日記には、この年の五月一日に同社を参拝した道孝が立ち寄ったことが記されている。その旧家には、現在も道孝が宿泊した際に使用したと伝える風呂などが現存している（9）。

なお、大織冠神社では現在も、鎌足の命日である一〇月一六日には阿為神社宮司と氏子により祭礼が催されている（図3）。

三、阿為神社(安威三丁目)

花園山の中腹に位置し、社殿の裏山には安威古墳群、西南の丘陵には將軍山古墳群が連なる。

同社は、延喜五年(九〇五)に編さんが始まった延喜式神名帳に名前が載る式内社で、祭神は中臣氏の祖神である天児屋根命である。安威一帯は、中臣氏の一族、中臣藍連の居住地であった。苗森神社ともよばれる。現在は鎌足古廟とされた大織冠神社を管理している。

重要美術品・三角縁唐草文帯二神二獸鏡(図4、5)

この鏡は、前述した大織冠神社とされる將軍山1号墳から出土したと伝わる三角縁唐草文帯二神二獸鏡(図4)である。青銅製で直径二四・一cm。昭和一〇年(一九三五)に重要美術品に指定され、阿為神社の社宝である。中国製で、三世紀末〜四世紀初めに鑄造されたと推定され、同範鏡に石切劔箭神社(大阪府東大阪市)所蔵品や普段寺1号墳(鳥取県南部町)出土品、大成古墳(島根県安来市)出土品がある。実際の出土地は、大織冠神社の西南方向に隣接していた前方後円墳である將軍山古墳(將軍山2号墳)から出土したと推定されている(10)。

この鏡には、鏡箱が附属する(図5)。直径二九・二cmで、表全体に茶漆を塗り、同家の家紋が蒔絵されている。蓋裏には朱漆で「奉獻 深津八郎右衛門 深津弥十郎 享保十九甲寅年五月吉辰」と銘文がある。これから、安威村に所領を有していた徳川幕府旗本の深津八郎右衛門正房と、深津弥十郎元義の兄弟によって享保一九年(一七三四)五月に奉納されたことが



図4 三角縁唐草文帯二神二獸鏡



図5 同鏡箱

わかる。この奉納が、鏡と鏡箱をセットで奉納したのか、神社にある鏡に合わせて鏡箱を新調したのかは解釈が分かれるが、深津氏が鏡を奉納したと記す史料がないことから、鏡箱だけの奉納と考える。

深津氏が安威村に所領を有したのは、深津弥十郎正貞からである。はじめ正貞は、父の遺領を引き継ぎ、関東地方に五百石を領した。承応三年(一六五四)に明正上皇(母は將軍徳川秀忠の娘)付となり、京都に赴いた際に安威・桑原・十日市村内に五百石を与えられ、都合千石となった(11)。明暦元年(一六五五)に越中守を受領し、万治三年(一六六〇)に京都で没して安威村に葬られた。菩提寺は後述する大念寺であり、位牌がある。墓は同寺の近隣にあり、越中塚と呼ばれている。

正貞の跡を継いだのは養子の正国で、鏡箱の奉納者である深津正房・元義兄弟の父である。下田奉行、駿府町奉行などを歴任し、享保一八年(一七三三)に没した。墓は正貞のとなりで、大念寺に位牌がある。旗本は江戸に墓を設けるのが一般的であり、領地に設けるのは珍しい(12)。

深津氏は藤原氏を称している。安威地域の伝承では、深津氏が京都での役職に就き、鎌足古廟の伝承のある安威で所領を与えられたのは、幕府が藤原氏系の公家へ配慮したためとされる(13)。しかし、史料でそれに言及したものは確認できない。

享保七年(一七二二)、正国は隠居するにあたり、安威村に五百石あった所領のうち三百石を正房に継がせ、元義に二百石を分知している。そして兄弟が阿為神社に鏡箱を奉納した享保一九年は、父正国が亡くなった翌年にあたる。鏡箱の奉納は父の死に伴うものであると共に、深津氏が藤原氏として始祖鎌足を顕彰することで、安威の領主としての権威を高めることを意図したものだと思われる。

鏡箱には、深津氏の家紋「上がり藤の内に左鎌」が大きく表されている。左鎌とはどのような鎌を指すのかは不明である。左向きの鎌の意であろうか。後世、鎌足にとって、鎌は象徴的な存在と見なされた。『多武峯縁起』では野獸が鎌を鎌足に献じたことあり、後述する大念寺の『撰州嶋下郡阿威山大織冠堂縁起並序』では、出生の際に鎌をくわえた白狐が現れて、「この子は天下を治める」と告げて鎌を置いて虚空に消え去ったことから、諱を鎌子または鎌足と号したとある。また、鎌足古廟(大織冠神社)に埋められた鎌足ゆかりの品の一つに、左鎌が挙げられている。

深津氏が藤原氏であるとの家伝については、『寛永諸家系図伝』の深津の項の冒頭に「今按ずるに、官本藤氏の系図に深津氏なし、清和源氏の流に深津氏あり、然れども家伝におほく藤原氏と称するゆへ、しばらくこれをこゝに載」とあり、全面的に首肯されているわけではない(14)。そこで深津氏は藤原氏を意味する上がり藤紋だけでなく、鎌足を象徴する左鎌をも添えることで、藤原氏であることを強く主張したのではないだろうか。文政七年(一八二四)、正房の子孫とみられる深津正保が大織冠神社に鳥居を奉納した。これも深津氏にとつて藤原氏としての由緒を喧伝するための一環であつたと推測される。

四、大念寺(安威三丁目)

阿威山善法院大念寺と号する浄土宗の寺院である。花園山南面の中腹、阿為神社の東隣に位置している。江戸時代に描かれた「撰津国島下郡安威村絵図」(個人蔵)では、花園山の内、大念寺のある山を「大織冠山」、阿為神社の山を「大織冠官山」と記すものがある。

同寺は創建当初は善法院と称した。寺伝では、斉明二年(六五六)に鎌足の発願により、鎌足の息子の定慧を開祖として創建された。室町時代に荒廃したが、天正一八年(一五九〇)に大山崎(京都府)の大念寺より専誉が入り、浄土宗の寺院・大念寺として再興し、現在に至っている。

『撰州嶋下郡阿威山大織冠堂縁起並序』

大念寺の由緒を記した史料である。宝暦十一年(一七六一)に同寺第十世の鎌足が同寺の古くからの伝承をまとめ、それを第一一世の慶譽が一巻の巻物にしたもの。縦三七・〇cm、横三九一・〇cmで、同寺の寺宝である。

これによれば、斉明二年、鎌足が四二歳の時に病で伏せていると、夢の中でお告げを得て、霊水が湧き出す傍らに霊竹が生える地に、当地に師事していた僧の慧隱を開祖として善法院を建立した。鎌足の子である定慧は、実は孝徳天皇のご落胤である。そこで慧隱は、開祖の座は定慧こそがふさわしいとして彼に譲り、自らは二世を称した。天智八年(六六九)に鎌足が亡くなると、その亡骸を同寺に移し、葬儀が行われた。そして寺から南へ一〇余町(約一・一km)の地に葬つたとある。これは、大念寺から南西に約一・一kmのところにある大織冠神社を指すとみられる。

戦国時代には兵火により荒廃し、本堂の旧跡を大織冠堂と称した。その後、天正一八年に専譽が再興して阿威山善法院大念寺と号し、享保六年(一七二一)に現在の伽藍が整備されたことを記している。

この縁起は、『多武峯縁起』に載る阿威山埋葬と、多武峯への改葬の話をもとに独自の逸話を織り交ぜ、大念寺と鎌足との関わりを表している。注目されるのは、室町時代に本堂の旧跡を大織冠堂と呼んでいたことである。相国寺(京都)の鹿苑院内の蔭涼軒主の日記である『蔭涼軒日録』の寛正四年(一四六三)一月二日の条目に「二月二日。撰津国善法寺大職官(ママ)廟堂御奉加帳御判被遊也。皮堂上葺勸進御判被遊也。御馬太刀可被出也。細河典廐被白也」とあり、大念寺の大織冠堂を指すと見られる。この記述から、一五世紀には既に大念寺は鎌足にゆかりがあると認識されていたことがわかる。現在伝えられる安威の鎌足伝承の大多数は、江戸時代以降の史料に登場することから、この記述は特に古い例である(15)。

阿為神社との繋がり

大念寺の毘沙門天立像は、元々は阿為神社に祀られ、明治時代の神仏分離令により大念寺に移されたと伝える。平安時代後期・一二世紀に奈良仏師によって制作されたと推定され、茨木市の文化財に指定されている(16)。

五月に催される阿為神社の春の例大祭での神輿渡御式では、朝に神社を出発した神輿が行幸を終えて神社へ帰る宮入り前に、鳥居の東隣にある大念寺の石段を山門前まで神輿が登る。登り切ったところで神輿が高く掲げられ、大念寺の阿弥陀如来に挨拶すると、寺の鐘が返礼として鳴らされ、神輿は神社へと帰った。鎌足にゆかりのある神社の結びつきがうかがえる。大念寺境内には、黄金竹と呼ばれる竹が生える。寺の言い伝えでは、鎌足のお手植えで、定慧が鎌足の遺骸を首だけ改葬したため、黄金竹は先端だけが枯れるようになり、片折れ笹という別名がついたとされる(17)。鎌足古廟が「胴塚」と呼ばれた伝承と関連すると考えられる。

藤原鎌足像(図6・大念寺寄託品)

藤原鎌足を大きく描き、その下部に向かって右側に長男の定慧、左側に次男の不比等を配した三尊形式で、「多武峯曼荼羅」と称される鎌足肖像画の典型である。縦九二・五cm、横三九・六cmで、江戸時代に制作された



図6 藤原鎌足像(大念寺寄託)

と推測される。鎌足の肖像研究については、黒田智氏によって精力的な研究が進められている(18)。それによれば、鎌足の肖像は近代に制作されたものや、現存が確認できないものの、史料上に認められるものを含めて一〇九点確認されている。木像や版本、図像が不明なものを除いた肖像画は、七八点になる。このうち、三尊形式が四八点(六一・五%)を占め、その多くが鎌足に定慧、不比等を配した組み合わせである。

本画は大念寺の檀信徒である安威村の旧家の伝来品で、同寺に寄託されている。多武峯曼茶羅を個人宅で所蔵する例は珍しいことから、鎌足古廟での祭祀に関連して九条家から拝領したか、談山神社周辺の村々で催される八講祭や明神講のような多武峯曼茶羅を配する祭礼が行われていた可能性が考えられるが、史料上では確認できない。由来は不明ながら、民間に伝来する多武峯曼茶羅として興味深い。

五、地福寺(桑原)

桑原山無量院地福寺と号する浄土宗の寺院である。桑原は、安威の北側に隣接する。安威は広い地域であり、江戸時代中頃に安威村から十日市村と桑原村が分村した。地福寺は、元々は安威川の河原近くにあったが、安威川ダムの開発に伴い、平成一六年(二〇〇四)に旧寺地を見下ろす高台へと移転した。

由緒について、『大阪府全志』によれば、皇極天皇(在位六四二〜四五)の治世時に、鎌足によって創建され、慧隠を開祖とした(19)。さらに同書によれば、鎌足は蘇我入鹿の専横を嘆き、これを討とうとしたが機が熟さなかったため地福寺に隠棲し、時が来るのを待った。光明石及び光明谷は、

鎌足の至誠を感じて神影を現わす光明が指した場所とされる。

中世には真言宗であったが次第に衰退し、天正年間(一五七三〜九二)に専誉によって浄土宗の寺院として再興された。鎌足自筆の画像と、鎌足・定慧・不比等の木像を所蔵し、天明四年(一七八四)に公家の九条家から、藤紋入りの紫絹幕や提灯の寄贈を受けたと記す。

大念寺と地福寺は、創建に鎌足が関与していることと、天正年間に専誉によって再興されたことなど共通点が多く、古くから深いつながりがあったのではないかと推察される。

『桑原山地福寺縁起』

地福寺の由緒を記した史料で、同寺に伝来する。縦三〇・〇cm、横八一・一cmで、江戸時代に記されたとみられる。

本縁起は、鎌足の誕生から蘇我氏の討伐、逝去と阿威山への埋葬、定慧の帰朝と多武峯への改葬などの鎌足の一代記と、地福寺の創建譚が主な内容である。前記した大念寺の大織冠堂縁起と大きく異なるのは、縁起の最後段に、唐から贈られる「面向不背の玉」を、途中で龍女に奪われたため、不比等が讚州房前の浦に行き、海士(海女)に頼み取り戻す「玉取り伝説」の逸話を挿入している点である。これは、謡曲『海士』の影響を受けている(20)。また、大念寺の縁起が、中世の荒廃と近世の復興までを記し、口述者や筆者の氏名を記しており、寺伝をまとめ、記録するという性格が強いのに対し、多武峯への改葬以降が記されず、年紀や筆者名がないことから、前者に比し、物語的な要素が強くなっている。

藤原鎌足像(図7)

鎌足、定慧、不比等の三人を描いた「多武峯曼茶羅」である。紙本着色で、縦八九・〇cm、横四一・二cmである。『桑原山地福寺縁起』に「鎌足大臣親筆の影像あり 中尊ハ鎌足大臣左ハ定恵和尚 右ハ淡海公(筆者注・不比等)なり」と鎌足自筆の多武峯曼茶羅があると記すが、本画がそれに該当すると考えられる。

制作は、室町時代(一五世紀)と推定され、鎌足の表情が眼光鋭く険しいのが特徴である。また、多武峯曼茶羅では、背景の巻き上げられた戸張の奥に、松に絡みつく藤を表した障壁画が描かれるのが一般的だが、本画で



図7 藤原鎌足像(地福寺蔵)



図8 『集古十種』掲載、地福寺蔵の藤原鎌足像(国会図書館デジタルコレクション)

は何も描かれておらず、上畳や鎌足の腰かける椅子の表現も典型作とは異なる。多武峯曼茶羅の中でも、古様を表していると見られる。

本画は、寛政年間(二七八九〜一八〇二)に松平定信が編纂した『集古十種』と『古画類聚』に掲載されており、数ある鎌足像の中でも有名なもの一つである(21)。黒田智氏は、本画が『集古十種』らに掲載された理由として、安威村近隣の太田、総持寺、中河原など二ヶ村が、延享年間(一七四四〜四八)から松平定信の実家である田安徳川家の所領となっていたことに注目し、安威地域の古物の情報が田安家経由で定信にもたらされた可能性を指摘している(22)。また、安威に領地を有する旗本で、阿為神社に鏡箱を奉納した深津元義とその子の元照は、田安家の近習番を務めていることも注目される(23)。

『集古十種』では、鎌足像(図8)、定慧像、不比等像が別々の頁に載る。鎌足像には「同像 撰津国地福寺蔵」とあり、定慧像、不比等像には鎌足像と共に描かれていることが記されている。一方、『古画類聚』では、「鎌

足公像 撰津国桑原村地福寺蔵」「右鎌足公画像左右侍坐之両像失其名」と記されており、定慧と不比等は像主名が当時分からなくなっていたことがうかがえる。模本の画風や正確さも両書では異なることから、地福寺での調査が、別々の人物・時期に行われた可能性が考えられる。

明治十一年(一八七八)の『桑原村村誌』には、「天明四辰年九月九条殿ヨリ鎌足公尊影前ト駿河院殿靈牌所トへ藤花徽号ノ紫絹幕一張同ク徽号ノ釣桃燈二張ヲ寄付セラレ今尚当寺ノ什物トス」とあり、天明四年(一七八四)に九条家が、「鎌足公尊影」の前に藤紋入りの紫絹幕などを寄進したことがわかる(24)。鎌足公尊影とは本画を指すと見られ、鎌足の自筆とされる本画が、地福寺の鎌足信仰の象徴的存在であったことがうかがえる。



図9 藤原鎌足半跏像、藤原定慧坐像、藤原不比等坐像

藤原鎌足半跏像、藤原定慧坐像、藤原不比等坐像(図9)

肖像画の多武峯曼茶羅と同じ三尊像の形式木像である。三体とも寄木造りで玉眼嵌入、彩色仕上げである。像高は鎌足像が三六・〇cm、定慧像が一三・五cm、不比等像は一六・三cmである。造形は、肖像画の多武峯曼茶羅の典型作に準じている。

以前の調査によれば、木像には厨子があり、その屋根根板に「京大ふつ七篠新地ノ下三の宮町ノ木ふせや藤兵衛ノ寛政二年いぬ十月ノさる」と墨書があることから、木像も寛政二年(一七九〇)頃の制作と推定された(25)。

鎌足の肖像画は数多いが、木像は珍しい。黒田智氏によれば、鎌足の肖像は近代に制作されたものや、現存は確認できないが史料上に認められるものを含めて一〇九点確認されている。そのうち、木像はわずか七点であ

る(26)。談山神社には、江戸時代に制作された鎌足、不比等、勝軍地藏の木像三尊像はあるが(27)、鎌足・定慧・不比等の多武峯曼荼羅形式の三尊像は、管見の限り本像のみであり、特筆すべき存在である。

千手観音菩薩立像(図10)

『桑原山地福寺縁起』には、「本尊ハ千手大悲観世音菩薩ノ御長式尺五寸両脇ハ不動毘沙ノ門何も春日明神の御作也」、「桑原山地福寺と名け御守ノ本尊千手大悲観世音菩薩の像を安置し亦親筆ノの御影を留めまします不測ノの霊場也」とある。本像、この縁起に記された春日明神の作で鎌足の念持仏との伝承を有する千手観音菩薩像に該当するとみられる。

観音堂の厨子内に安置され、木造、素地、玉眼嵌入で、高さ八六・一cmである。現在、地福寺では阿弥陀如来坐像を本尊とするが、前記縁起から、古くは本像が本尊であったと推測される。平成一五年(二〇〇三)の解体修理の際に、像内脚部背面に、大仏師大宮法眼院芸が康正三年(一四五七)に修理したことを記した墨書銘が発見され、それよりも制作年代が遡ることが確実である。そして作風から、南北朝時代(一四世紀)の制作と推定され、同時代の彫刻様式を反映させた貴重な作例と評価されている(28)。

六、地名・旧跡

鎌ヶ淵

安威川の岸辺の名である。明治時代前期に記された『安威村名所旧跡調』



図10 千手観音菩薩立像(地福寺蔵)

によれば、「鎌ヶ淵ハ桑原橋ヨリ安威川ヲ上ル事三町 藤原鎌足公 手ニスル鎌ヲ投げ入レ給ヒシヨリ名ツクト云ウ」とあり、鎌足にちなむ地名であることがわかる。前述の大織冠神社に伝わる鎌足の遺物である鏡と太刀、左鎌が納められた話や、安威村の領主であった旗本深津氏の家紋にも左鎌が蒔絵されており、鎌が鎌足を象徴する持ち物であったことが伺える。

安威砦

大念寺のある花園山の北東に隣接する天神山にあった砦跡。明治九年(二八七六)に安威村から大阪府へ提出された書状の控えである『古城古墳取調書上之写』(個人蔵)には、この砦は鎌足の命によって築かれたもので、麓にはかつて、「鎌足公旗指の松」と呼ばれた大樹があったことや、「鎌足公の杖笹」とよばれた竹林が隣にあることが記されている。

おわりに

本稿では、後世に大織冠と通称された藤原鎌足が、墓所とされる多武峯談山神社に改葬される以前に葬られた地と伝える茨木市安威周辺での大織冠伝承をまとめた。全国的にみても、鎌足を祀った談山神社や、鎌足の威徳をしのぶ八講祭が催されていた多武峯周辺の集落、藤原氏の氏寺・興福寺(奈良市)などの大和国(奈良県)以外の地域で、多くの大織冠伝承が確認できる安威地域は稀有な例である。これから、鎌足の埋葬地であったことを誇る安威の人々の心情が伺える。

鎌足ゆかりの大念寺と地福寺では、大織冠堂の名称や、一五世紀に描かれたと推定された肖像画など、中世以来の伝承がみられる。しかし、安威の大織冠伝承の多くは近世、中でも一八世紀以降に地誌や村誌で確認できる。これらから、この地の大織冠伝承は、中世では大念寺と地福寺を中心に、創建伝承として脈々と受け継がれてきたものが、一八世紀以降、人口に膾炙するようになったとみられる。今後の課題として、江戸時代に安威の大織冠伝承が広まっていく背景を読み解くために、『多武峯縁起』といった阿威山への埋葬を採り上げた縁起の普及や、国学における鎌足の評価、歌舞伎や浄瑠璃で人気であった「大織冠物」から見る庶民の鎌足のイメージの検討が求められる。

【註】

- (1) 「大織冠」は、大化の改新の際に定められた最高の冠位。授かったのは藤原鎌足が史上唯一であったことから、後世には彼の代名詞となった。
- (2) 多武峯寺の初代検校・座主である延安(九〇四年没)が語り伝えた話を基に、延喜一七年(九一七)に成立した。(『新修茨木市史 第一巻 通史』) 茨木市史編さん委員会、二〇一二年)。
- (3) 『日本書紀』は、定慧は鎌足在命中の天智四年(六六五)に没したと記す。
- (4) 『古城古戦場古墳古跡書上控』(茨木市史編さん室編『新修茨木市史史料集2 村誌』、茨木市域、二〇〇一年)。
- (5) 現在、太刀刀と左鎌は確認できない。天坊幸彦は『大阪府史蹟名勝天然記念物第二冊』(大阪府学務部、一九二八年)の「將軍塚」の項で、「大刀は直刀にして腐蝕殆んど形を存せず」と記す。また、明治八年(一八七五)に安威村から大阪府へ提出された大織冠神社の『神寶神器取調書上之写』(個人蔵)には、鏡や大刀を石簞より取り出した際に、左鎌は既に失われていたとある。
- (6) 小松茂美編『続々日本絵巻大成伝記・縁起篇8 東照社縁起』(中央公論社、一九九四年)。
- (7) 高槻市立今城塚古代歴史館・しろあと歴史館秋季合同特別展図録『藤原鎌足と阿武山古墳』(二〇一八年)。
- (8) 『茨木の史跡』(茨木市教育委員会、一九九八年)。
- (9) 前掲(7)に同じ。
- (10) 茨木市史編さん委員会『新修茨木市史 第七巻 史料編考古』(二〇一四年)。
- (11) 『寛政重修諸家譜第七百七十 藤原氏 支流 深津』(『新訂 寛政重修諸家譜』第十七、続群書類聚完成会、一九六五年)。
- (12) 前掲(11)では、正国は江戸牛込の万昌院に葬られた。以降、深津氏は代々同寺に葬られたとあることから、複数の墓所があったとみられる。
- (13) 宇津木秀甫『安威郷土史』(郷土史委員会、一九九八年)。安威村では、旗本中川家も明正上皇付に就いた際に安威村に知行を得ていることから、地元では明正上皇付の役職が意識された可能性がある。
- (14) 『寛永諸家系図伝』第12(続群書類従完成会、一九八八年)。
- (15) 『摂州鳴下郡阿威山大織冠堂縁起並序』と『蔭涼軒日録』の記述については、大念寺副住職河合良祐氏から教示を得た。
- (16) 茨木市史編さん委員会『新修茨木市史 第九巻 史料編 美術工藝』(二〇〇八年)。

- (17) 大念寺副住職の河合良祐氏から教示を得た。
- (18) 黒田智『中世肖像の文化史』(ぺりかん社、二〇〇七年)。
- (19) 井上正雄『大阪府全志』巻之三(大阪府全志発行所、一九二二年)。
- (20) 『海土』は、玉取り伝説の祖型になった『志度寺縁起』と同様に不比等が主人公であるが、『大織冠』では鎌足が主人公で、不比等は海女との間にもうけた子とされる。
- (21) 『集古十種』は著名な古宝物の模写図を集成した図録集。全八五巻。松平定信の編纂により寛政一二年(一八〇〇)頃に成立した。『古画類聚』も松平定信により編纂されたもので、『集古十種』の後集ともされる。
- (22) 高槻市立今城塚古代歴史館・しろあと歴史館秋季合同特別展記念講演会「藤原鎌足像を読む」秘められたメッセージ(二〇一八年一月一七日開催、講師・黒田智、高槻市教育会館)にて言及。
- (23) 前掲(11)に同じ。
- (24) 「桑原村村誌」(茨木市史編さん室編『新修茨木市史史料集1 村誌』、二〇〇〇年)。また、黒田智氏は前掲(22)において、同年同月に二条輔嗣が誕生したことに注目している。輔嗣は、九条家から二条家へ養子に入った二条宗基の孫で、後に九条家へ養子に入った。輔嗣は生誕時から九条家の跡取りとして期待され、地福寺への寄進もその表れではないかと推測している。
- (25) 『大阪府茨木市所在 安威川総合開発事業に伴う文化財等総合調査中間報告書 安威川ダム建設関係地域の自然・歴史・文化』(財)大阪府文化財調査研究センター調査報告書 第9集、財団法人大阪府文化財調査研究センター、一九九七年)。二〇一八年の筆者の調査では、厨子は確認できなかった。
- (26) 前掲(18)に同じ。
- (27) 奈良国立博物館『大和の神々と美術 談山神社の名宝』(二〇〇四年)。
- (28) 前掲(16)に同じ。

発行日 二〇一九年一〇月五日 編集・発行 高槻市立しろあと歴史館

大阪府高槻市城内町一番七号・TEL〇七二(六七三)三九八七

◆ホームページ：高槻市ホームページ「インターネット歴史館」内で掲載

http://www.city.takatsuki.osaka.jp/rekishu_kanko/rekishu/

http://www.city.takatsuki.osaka.jp/rekishu_kanko/rekishu/rekishikan/chosa/shiroato/shiroato_dayori/index.html